分別ある忠告
――『妖精の女王』第2巻における Guyon と the Palmer の関係 ――

橋　本　有　加

はじめに

エドマンド・スペンサー（Edmund Spenser, 1552-99）は、『妖精の女王』（*The Faerie Queene*, 1590, 1596）(1) の全6巻において、それぞれの巻に徳を設定し、それらの徳を体現する主人公を割り当てており、それぞれの徳に基づいた物語を描いている。本論で扱う第2巻には節制（Temperance）(2)の徳が割り当てられている。第2巻を要約すれば、節制が不節制（intemperance）などの対立する相手に打ち勝ち、その徳を鍛えていくという物語である。不節制とは、本作品において、主に欲望のことである。つまり、節制とそうした不節制などが戦うことは、現実世界に存在する我々にとって、当然にさらされている状況といえる。従って、スペンサーが『ローリへの手紙』（“Letter to Raleigh”）(3) の中で書いたように、読者のことを考慮して寓意形式を取り、さらにアーサー王子を登場させることにより、彼の希望する読者、あるいは聴衆である身分の高い人々に立派な道徳的訓育を施すという目的を持つ中で、比較的理解しやすい徳として、捉えられるのではないだろうか。

節制の徳を体現する Guyon は the Palmer という随行者と共に冒険の旅をしている。旅の中で、彼は幾度となく危機に見舞われ、自身の持つ修行中の節制の徳によってだけでは切り抜けることが難しいと思われる状況に遭遇する。しかし、Guyon の未熟な徳を支える役割を担う the Palmer が、忠告や、時には行動で、Guyon を助け、正しい道へ導いて行くのである。

本論の目的は、Guyon ではなく、彼を支える役割を担っている the Palmer の存在と彼の Guyon への影響を考察し、the Palmer が主人公の Guyon から見ると脇役という立場を与えられながらも、非常に重要な人物であるということを明らかにすることである。

1. The Palmer―分別の徳とその位置づけ

巡礼をした者は、一般的にエルサレムやカンタベリーなどの聖地へ行った者であると考えられている。従って、『妖精の女王』に登場し Guyon と共に旅をする the Palmer は、その名の通り、

聖地へ巡礼してきた人物として考え得るのである。そして、『妖精の女王』の第2巻における the Palmer は Guyon の理性を正しく導く役割を担っている。このことは、Helen Cooney も the Palmer は分別の徳（the virtue of Prudence）[4] もしくは理性（right reason）を有していると述べており（172）[5]、また、Douglas Brooks-Davies や Rosemond Tuve は the Palmer が基本徳目（the first of the four classical cardinal virtues）の一つの分別の徳を表していると示している（118-119）[6]。The Palmer が分別の徳を表すことは、the Palmer が Guyon の理性の役割を担う登場人物であるということからも十分言えるだろう。あるいは、その反対でもあり、the Palmer が Guyon の理性としての役割を担うには、分別が必要であるということも言える。つまり、the Palmer は Guyon の理性を司る立場に位置する登場人物であることによって、Guyon の一部、あるいは彼と二人で一人のようなところがあるけれども、一方で、分別という徳を任されていることを忘れてはならない。The Palmer は Guyon を正しい方向へ導く役割を担っているだけでなく、その責務と同時に、一人の独立した人物としても捉えることが可能になる。

分別（prudence）の徳をきちんと定義させておくことは、本論の展開に重要であるので、どのように分別が定義されているかを、*M.E.D.* と *O.E.D.* から引用しておく。まず、*M.E.D.* では、“wisdom, intelligence; discretion, foresight, shrewdness; knowledge, words of wisdom, and one of the four cardinal virtues, prudence; the wisdom to see what is virtuous”. そして、*O. E. D.* では、“ability to discern the most suitable, politic, or profitable course of action, especially as regards conduct; practical wisdom, discretion, and another meaning is foresight, providence” とある。両方の辞書に共通して定義されていることは、分別には賢さがあり、知識があり、そして先見の明があるということとなる。

また、the Palmer の持つ分別の徳、すなわち “the Virtue of Prudence” は、スペンサーが『妖精の女王』を生み出す以前にどのように捉えられ、使用されていたのであろうか。それは具体的に、ジェフリー・チョーサー（Geoffrey Chaucer, c. 1340-1400）の『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*, 1387-1400）の中の物語の一つである「メリベウスの物語」（“The Tale of Melibee”）に見ることが出来る。「メリベウスの物語」は、Melibee の妻の Prudence がソロモン（Solomon, c. 10th century）やキケロ（Marcus Tullius Cicero, 106-43 BC）、聖書からの言葉などを用いて、夫 Melibee の考えを改めさせる物語である。従って、この物語を読むと、チョーサーだけでなく、チョーサー以前の “Prudence” についても知ることが出来るのだ。

最終的に、Melibee は Prudence の言葉を受け入れ、考えを改めるので、最初の段階では、Melibee に分別はなかったのだから、Prudence は彼女の名前が示している通り、Melibee に分別を付与するという役割を担っているのである。Judith H. Anderson も、“Melibee is clearly imprudent.”（30）であると指摘している。

まず、Prudence は Melibee に

And after that, thow shalt considere thy freendes and thyne enemys.

And as touchynge thy freendes, thow shalt considere which of hem been moost feithful and moost wise and eldest and most approved in conseillyng;
and of hem shalt thou aske thy conseil, as the caas requireth.（*The Riverside Chaucer* 1154-1156）

と話しかける。それから “For the book seith that in olde men is the sapience, and in longe tyme the prudence”（1163）と続けて言うのである。これらの引用を『妖精の女王』での the Palmer の描写と比べると、the Palmer に当てはまることが分かる。The Palmer の風貌は “of rypest yeares, and heares all hoarie gray”（2.1.7.3.）“feeble steps”（2.1.7.4.）とされているので、the Palmer は老齢であり、Prudence の指摘する “eldest”、すなわち老人と言うことが出来る。そして、the Palmer は老人であるので、Prudence の言葉に従うと、“in olde men is the sapience, and in longe tyme the prudence” である。また、Prudence は “…Tullius seith that grete thynges ne been nat ay accompliced by strengthe, ne by delivernesse of body, but by good conseil, by auctoritee of persones, and by science; the whiche thre thynges ne been nat fieble by age, but certes they enforcen and encreescen day by day”（1164）と話しており、以下に引用する the Palmer の描写と比較すると、the Palmer は老人であり、足は衰え、身体は弱っていくが、老人には知恵があり、分別があるということが明らかになる。

Him als accompanyd vpon the way
A comely Palmer, clad in black attyre,
Of rypest yeares, and heares all hoarie gray,
That with a staffe his feeble steps did stire,
Least his long way his aged limbes should tire:
And if by lookes one may the mind aread,
He seemd to be a sage and sober syre,
And euer with slow pace the knight did lead,
Who taught his trampling steed with equall steps to tread.
（*The Faerie Queene* 2.1.7.）

以上、示してきた Prudence の発言と the Palmer の描写を比較すると、the Palmer には分別が備わっていると考えられる。そして老人に分別が備わっていることについては、スペンサー以前に活躍したチョーサーや、チョーサーが参考にして Prudence に語らせた言葉が、ソロモンやキケロ、聖書などからも取り入れられていることから分かるように、たんにスペンサーのみによる発見ではないと言える。分別を備えた the Palmer は、Prudence の言葉にある “conseillours”（1204）、つまり忠告をする者であるから、“resoun”（1204）を司っているのであり、このことは

先に述べた通り、the Palmer が Guyon の理性を司るということに一致するのである。

The Palmer が分別の徳を備え、Guyon の理性を司るということを明らかにしたので、その点を踏まえて、第 2 巻の中から、the Palmer の備えている徳が、分別を表し、Guyon の理性を担うという性質を持つ徳であることを示す箇所を挙げたい。

During the while, that Guyon did abide
In Mamons house, the Palmer, whom whyleare
That wanton Mayd of passage had denide,
By further search had passage found elsewhere,
And being on his way, approched neare
Where Guyon lay in traunce, when suddeinly
He heard a voyce, that called lowd and cleare,
Come hether, come hether, O come hastily;
That all the fields resounded with the ruefully cry.

The Palmer lent his eare vnto the noyce,
To weet, who called so importunely:
Againe he heard a more efforced voyce,
That bad him come in haste. He by and by
His feeble feet directed to the cry;
Which to that shady delue him brought at last,
Where Mammon earst did sunne his threasury:
There the good Guyon he found slumbring fast
In senceles dreame; which sight at first him sore aghast.
(*The Faerie Queene*. 2.8.3-4)

上に挙げた箇所は、Guyon が the Palmer と離れ離れになった時に、「富」を表す Mammon と出会い、彼の四つの誘惑を自分自身の節制の徳だけで退けた後の場面である。Guyon は Mammon について洞窟の奥へ行って来たのだが、三日間も洞窟の中で過ごした為に、食事と睡眠を摂ることが叶わず、Mammon に頼んで再び地上に戻してもらうのだ。しかし、Guyon は地上の光に耐えられず、気を失って倒れてしまう。そこへずっと離れ離れになっていた the Palmer が駆けつける場面である。

The Palmer が Guyon の倒れているところに近づくと、どこからともなく謎の声が聞こえてくる。「急いで来て」という声がする。The Palmer は声の主を訝りながらも、声がする方へ急いで向かう。すると、Guyon が前後不覚に陥り、倒れ込んでいる姿を目にして驚くのだが、それに

も増して驚いたのは、Guyon の横には、驚くほど美しくて若さ溢れる若者が座っていたことである。この若者は天使であった。その姿を見て the Palmer は、驚きと恐れで口もきけなくなる状態になってしまう。そうこうしていると、the Palmer は天使から一方的に話しかけられ、結局、the Palmer が一言も言葉を発しないままに天使は消えてしまうのだ。

この場面から分かる重要な点は、the Palmer が天使の声を聞き、天使の姿を見るけれども、会話はしていないこと、そして、Guyon の方は、気を失っているので、天使の声や姿は分からないけれども、神の命を受けた天使に直接守られていたことである。

Guyon は節制の徳を持つ騎士なので、天使は神の命により彼を守ったのである。そして、天使は “The charge, which God doth vnto me arrett, / Of his deare safety, I to thee commend; ”（2.8.8.1-2）と言って、Guyon を直接守る役割を the Palmer と交代する。つまり、天使は一方的に the Palmer に対して Guyon を支えていくように依頼し、the Palmer の返事を聞くことなく消えていくことを考慮すると、天使と the Palmer は会話をしていないと分かる。天使と the Palmer は同等ではないけれども、同じような役割をすることを許容されたのである。そう考えると、the Palmer が神の命を直接受けた天使から、正式に Guyon を守ることを任されたのだから、旅を通して the Palmer の支えを得る修行中の Guyon の完璧ではない節制という徳は、理性に支えられて、導かれて、その特質を発揮し、且つ成長していき、より高みへ近づくことが可能であると考えられる。言い換えると、節制という徳は、the Palmer の分別という性質によって支えられているからこそ、より高い次元へと昇華されていくのである。Guyon に見られる節制の徳は、理性あるいは分別に守られないと、徳としても、Guyon の人間性としても不安定で、幼い性質を持つと分かる。

The Palmer が Guyon を支える役目を与えられたことは、the Palmer を同じく Guyon の傍にいた Mammon と比較しても了解される。Guyon が初めて Mammon を見かけた時、彼は鍛冶屋の姿をし、周り一面、とても使い切れない金の山に囲まれ、莫大な財産を膝の上で数えて、自身の目と飽くことなき欲望とを楽しませていたところであった。莫大な財産を数えている姿を、Mammon は Guyon に見つけられてしまい、急いでこの宝の山を隠すのだが、Guyon に飛びかかられてしまう。宝の山を持つことで、Mammon は Guyon の姿を見て慌てふためくのだ。

しかし、ここで思い出したいのは、Mammon は Guyon を洞窟から地上に連れ戻った後、Guyon が気絶をしても助けなかったことである。スペンサーが Mammon に Guyon を助ける役割を与えなかったことは、Mammon と the Palmer には Guyon を導く者としての違いがあるということを示している。The Palmer は Guyon の付き添いとして共に旅を続けており、先に示した通り、分別の徳と Guyon の理性を司ることで、Guyon を支えて導いていたのである。しかし、一方で Mammon は Guyon を洞窟へ導き案内はするけれども [7]、決して Guyon の理性として機能はしておらず、地上に戻ってきて Guyon が気絶しても介抱はしていない。そして、神から命を受けた天使から直接守るように依頼されたわけでもない。

こうして、the Palmer と Mammon を比較すると、Guyon を導く者としての本質的な役割、機

能の違いは、改めて the Palmer に分別が備わっていること、Guyon の理性として役割を担っていること、神の命を受けた天使から Guyon を守ることを任されたことを強調させる材料となる。

2. The Palmer と Guyon の関係

さて、こうして the Palmer には分別の徳があり、Guyon の理性としての役割を担っているということを、Guyon ではなく the Palmer に注目することによって明らかにしたので、次に、the Palmer と Guyon が、行動を共にする時と、そうでない時の、二人の様子を追っていくことで、この二人の登場人物の相互関係を詳しく見ていき、彼らの関係を考えたい。

まず、the Palmer と Guyon が離れ離れになってしまう Phaedria の場面から見ていこう。Phaedria の登場する箇所は二度出て来るのだが、一度目は the Palmer と Guyon を別ち、二度目は the Palmer の言葉で離れ離れにはならずに済むところである。こういった Phaedria の二度の場面から、the Palmer の分別、理性が発揮される時と、そうでない時の違いを見ていき、その結果から、Guyon に分別、理性が働く時と、そうでない時の様子を、the Palmer の必要性の観点から明らかにしたい。

Phaedria が Guyon と the Palmer の前に初めて現れる場面は、以下の通りである。

By this time was the worthy Guyon brought
Vnto the other side of that wide strond,
Where she was rowing, and for passage sought:
Him needed not long call, shee soone to hond
Her ferry brought, where him she byding fond,
With his sad guide; him selfe she tooke a boord,
But the Blacke Palmer suffred still to stond,
Ne would for price, or prayers once affoord,
To ferry that old man ouer the perlous foord.（2.6.19.）

上に記したように、Phaedria は Guyon を渡し舟に乗せるけれども、the Palmer は決して乗せようとはしないのである。しかし、すでに Guyon は彼女の舟に乗り込んでいたので、Phaedria は二人が別れの挨拶をする間もなく舟を出してしまい、Guyon と the Palmer は離れ離れになってしまう。

この時、Guyon を導く者が the Palmer から Phaedria に代わる。Guyon は第 6 歌第 21 連の 6 行目から 9 行目に見られる、Phaedria の慎ましい楽しみを超えた態度を軽蔑し、そうした振る舞いを止めるように頼んだが、Phaedria は一向に聞き入れようとはしなかった。Phaedria は、若さに溢れ、軽率で、何も考えないで話したり、歌ったり、戯れたりするが、the Palmer は老人

であり、その歩みは緩慢である。このようなスペンサーの二人の描写の違いから、Phaedria が Guyon を正しい方向へ導くことには向いていない性質であることが分かる。さらに、Guyon が怒りながら “…Ah Dame, perdy ye haue not doen me right, / Thus to mislead mee, whiles I you obaid: / Me litle needed from my right way to haue straid”（2.6.22.7-9.）という言葉を述べることからも明らかになる。Cooney も the Palmer と Phaedria について “the Palmer is old, slow, black, and sober, Phaedria is young, bright, swift, and immoderately cheerful”（183）であると比べている。また、Phaedria が Guyon を得体のしれない島へ連れてきたことに対して彼が怒っても、Phaedria が the Palmer のところへ戻ろうとしないのは、この時には Guyon の傍らに the Palmer が存在せず、一時的に Guyon を導く役割が the Palmer から Phaedria へと移っているからである。なぜなら、分別や理性を担う the Palmer をしばし失っている Guyon は、軽率な振る舞いをする Phaedria にとって脅威ではなく、得体の知れない島へ連れて行こうとするように、誘惑すべき対象に入るからである。Phaedria は出会った騎士達を Acrasia の住む the Bowre of Bliss へ連れていく役割を担っている。しかし、第 6 歌 37 連で Phaedria は Guyon を the Bowre of Bliss へ連れて行こうとする途中で、彼を元の場所まで帰そうと考えるのである。なぜなら、Guyon が彼女の誘惑に乗らず、そして Pyrochles と戦う姿を目にし、彼女自身を恐怖と不安にさせ、楽しみごとの邪魔になるだけであると判断したからである。Cooney も Phaedria の性質に関して、“Phaedria’s goal is to have no goal but only the aimless delight of the present moment”（183）と考えている。

次に、Phaedria が二度目に登場する場面、すなわち、第 2 巻の最後の第 12 歌を検証してみよう。Guyon と the Palmer が船頭の進める舟に乗って荒れ狂う海を航行している時に、海を漂うある島の傍を通らなければならなくなるのだが、その島の様子は、見るからに美しく楽しげに見え、島の岸辺では、乙女が髪の手入れをしていた。この乙女こそ、後を読み進めれば明らかになるが、Phaedria のことである。

Phaedria のいる島の横を通らないといけない（needes must passen by, 2.12.14.4.）とあるように、Phaedria に会うことは避けられないということと考えられる。Phaedria は Guyon 達にもっと島の岸に寄せるように、大声で笑いながら（lowdly laught, 2.12.15.4.）頼んだ。Guyon や the Palmer 達が、彼女の誘いに乗らずに通りすぎようとしたので、Phaedria は髪の手入れの途中にも関わらず、急いで島から舟を漕ぎだして（launched light, 2.12.15.8.）Guyon 達の元へやって来るのだ。つまり、誘惑、すなわち節制の徳を期待される Guyon からすると、不節制と考えられるのだが、この不節制を相手にしないようにしても、不節制は自らやって来たのだ。しかも、力を奮って近寄って来る。Phaedria は Guyon 達の乗る舟に追いつくと、一度目の登場の時と同じように、関心を得ようと馬鹿げた態度（being loose and light, 2.12.16.6.）を取るのである。

しかし、Phaedria の一度目の登場時と異なるのは、the Palmer が “…Till that the Palmer gan full bitterly / Her to rebuke, for being loose and light: / Which not abiding, but more scornfully / Scoffing at him, that did her iustly wite, / She turnd her bote about, and from them rowed quite”

(2.12.16.5-9.) という毅然とした態度を Phaedria に対して取ることである。一度目と違い、二度目の場面では、Guyon の分別、理性として機能している the Palmer が存在し、正しく彼の責務を果たそうとして、Phaedria を叱責しているのだ。Phaedria を叱った結果、彼女はどこかへと漕ぎ去っていくので、the Palmer は彼の役割を果たせたと考えて良いだろう。

このように Phaedria の一度目と二度目の登場場面を比べると、the Palmer と Guyon が離れ離れになるか、ならないかで、the Palmer の持つ分別、理性という役割が果たされるか、果たされないかが、定まってしまうことが明らかとなる。

また、Phaedria の場面以外にも、Guyon が the Palmer から判断や答えを仰ぐ場面、あるいは、教えられる場面があるのだが、それは Guyon が the Palmer の分別、理性を求めているということであるから、彼らの関係を見ていくのに適していると考えられるので、そういった場面をいくつか列挙して見ていくこととする。

まず一つ目に挙げたい場面は、Guyon 達が航行を続けていると、ある島で綺麗な乙女が座っているのを見つける場面である。その乙女は大声で嘆き悲しんでいたので、Guyon は乙女の悲しみの原因を慰めようと思い、the Palmer に命じて乙女の方へ向かおうとするところである。しかし、the Palmer はその乙女が "she is inly nothing ill apayd" (2.12.28.7.) であると分かっており、相手にしないように Guyon を諭す。その忠告に "The Knight was ruled" (2.12.29.5.) というように、Guyon は素直に従う。

他に Guyon が the Palmer の忠告に従う箇所は、第 12 歌の第 33 連と 34 連の、"…The whiles sweet Zephyrus lowd whisteled / His treble, a straunge kinde of harmony; / Which Guyons senses softly tickeled, / That he the boteman bad row easily, / And let him heare some part of their rare melody" (2.12.33.5-9.) である。 西風 [8] が世にも珍しい音楽を奏でたので、Guyon は優しい感覚をくすぐられる。Guyon は西風の旋律を聴きたがったが、the Palmer が "temperate aduice" (2.12.34.2.) を Guyon にすることで、先に進んでゆく。

そして、第 37 連では、the Palmer が、あらゆる危険が生じる土地が見えてきたので、Guyon に武具を身につけるようにと言い、それに対して Guyon は言われたとおりに武具を身に着ける [9] のである。

また、第 63 連から始まる、Guyon が偶然二人の裸の乙女が水浴びをしているところを通りかかる場面で、Guyon はまじめな歩みを少し緩め、二人の裸の乙女の姿に惑わされそうになる (… somewhat gan relent his earnest pace; / His stubborne brest gan secret pleasaunce to embrace. 2.12.65.8-9.)。しかし、Guyon はそのことを the Palmer にひどく叱られ、前進するように諭されるのだ。そして、"the Bowre of Blis" という Acrasia の住むところまでやって来る。ここでも "… Now are they come nigh to the Bowre of blis / Of her fond fauorites so nam'd amis: / When thus the Palmer, Now Sir, well auise; / For here the end of all our traueill is: / Here wonnes Acrasia, whom we must surprise, / Els she will slip away, and all our drift despise" (2.12.69.4-9.) とあり、the Palmer が Acresia の住む the Bowre of Bliss に到着したことを Guyon に知らせて、忠告をし

ていることがわかる。この the Palmer からの言葉を Guyon は受け止める。

さらに、第 12 歌の第 39 連、第 40 連では、the Palmer が Guyon に対する主導権を握っていることが読み取れる。The Palmer が途方もなく吠え立てている野獣たちに杖をかざすと、野獣たちはおとなしくなり、二人を見て怯えるようになった場面である。 その杖は “Such wondrous powre did in that staffe appeare, / All monsters to subdew to him, that did it beare”（2.12.40.8-9.）と描写される。 そして、これらの野獣たちが第 84 連にて、再び登場するのだが、その際、the Palmer がすぐに取り静める。この時、Guyon が the Palmer にこの獣たちは一体何かと尋ねると、the Palmer は、見かけは獣だが、実は人間であり、獣のような心に応じて、ひどく醜い姿に変えられていると答えを返した。

そして、この第 2 巻の第 12 歌は the Palmer の “…The donghill kinde / Delightes in filth and fowle incontinence: / Let Gryll be Gryll, and haue his hoggish minde; / But let vs hence depart, whilest wether serues and winde”（2.12.87.6-9.）という言葉で終わっている。この言葉を見ると、the Palmer は不節制を望む者はそのままにしておいて、節制を志す者、すなわちここでは Guyon は先に進んでいこうという催促をしているのである。節制を体現していく Guyon に対して、the Palmer はイニシアティブをとっている。

こうして Guyon と the Palmer の関係が分かる箇所を挙げていくと、Guyon は the Palmer が居なければ、Phaedria の例を見ても明らかなように、正しくない方向へ進みがちである。しかし、the Palmer が Guyon の傍に居て、適切な会話をする時には、the Palmer が Guyon の分別、理性としての機能を果たし、正しい道を示していると考えて差し支えないだろう。加えて、上に列挙したように、第 12 歌にて、the Palmer の必要性が認められる場面が多く見受けられるのも注目に値する。

3. 脇役の必要性

Guyon が自らの持つ節制の徳を高めて、より高次なものとするには、the Palmer が分別、理性として機能し、正しい道を示すことが必要であるということが分かる。つまり、Guyon には the Palmer の存在が重要であるということである。

先に見てきたように、the Palmer には分別の徳が備わっており、Guyon の理性を司っている。そして、このことは、具体的にいくつかの例を挙げた通り、Guyon が the Palmer に随時質問をして答えを求めたり、行動を慎むように注意されたり、倒れているところを助けられたり、次に取るべき行動を促されたりといった場面を見ると分かる。実質的な決定権というべきものは the Palmer にあると考えてよいだろう。Guyon にとって the Palmer は節制の徳を高める支えになるだけでなく、the Palmer が存在しなければ、Guyon は誰かに捕らえられたり、あるいは命を落としたりして、冒険を続けていけなくなるのではないだろうか。この第 2 巻は、特に the Palmer という脇役の立場が重要で必要不可欠となる。

Mammon や Phaedria の場面では、Guyon と the Palmer が離れ離れになり、共にいることが叶わず、Guyon にとって危機が訪れるけれども、Guyon はどうにか自らの徳を発揮し、その時々の状況に対して奮闘する姿が見受けられる。しかし、最終的に Guyon をそういった危ない状況から救い出す役割は、the Palmer の言葉や行動に委ねられており、やはり、Guyon は旅をして成長していくことが必要とされる立場であるのだ。このことは、まだ彼らの旅が続いていくことが暗示されていることからも明らかではないだろうか。最後の the Palmer の台詞からも窺えるように、Guyon の冒険はまだ当分続きそうであり、the Palmer は彼を支える脇役として必要となってくるのだ [10]。

おわりに

Spenser が the Palmer に対して、節制の徳を体現する Guyon よりも大切な判断をする重要で機能的な役割を与えていることは、the Palmer が Guyon の分別や理性として働いている場面を見ていくことにより明白となる。では、本論で第 12 歌を中心に列挙したいくつかの場面に示されるような描写をなぜスペンサーは描いたのであろうか。それは、the Palmer の特性を強調し、Guyon に対する立場をはっきりと示すことで、the Palmer 自身、そして Guyon の特性をも一度に見せることが可能であるからだと考えられる。そして、Guyon と比べると、脇役となる the Palmer ではあるが、重要な登場人物である。彼が存在して、機能してくれているからこそ、物語が展開していき、Guyon が成長を見せられるようになるのである。

また、本論で引用した Cooney の論文は、数々の論文の中で、本論と比較的近い着眼点を有しているのだが、the Palmer に重点を置いてはいない。The Palmer を、“an allegory of care” という点において、Mammon や Phaedria と比べて論じている。Cooney は、Mammon を “carefulness”、Phaedria を “carelessness” とすることで、the Palmer をその中間に位置させ、三者の特徴を検証し、the Palmer を正しく理解しようと努めている。しかし、本論と比べると、the Palmer よりも Mammon と Phaedria に重きを置いている印象を受ける。この点で、本論は、the Palmer を中心に据えて論じているので、Cooney の考察とは異なった過程を辿ることとなり、結論も別のものとなった。The Palmer の特性の考察を、本論の軸に据えて論じることにより、新たな方向性を示せたのではないだろうか。

注

（1） Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Ed. A. C. Hamilton. London: Longman, 2006. 715. 以下、*FQ* と略記。

（2） キリスト教用語の日本語表記は基本的にハードン『現代カトリック事典』に基づく。「快楽に対する欲望を抑制する徳。節制は大きい快楽に対する欲望を抑制する。快楽はすべての自然活動から生じるものである為、最も自然的な活動と関連のあるときに最も強烈である。個人に関する場合、飲食と関

係のある快楽が最も強く感じられ、人類に関する場合、性交による身体的快楽が最も大きい。節制の徳はおもにこれらの生理的欲求を抑制する」(ハードン 422)。Attwater も同様の指摘をしている(516)。その他の研究者による Temperance の定義は次のようなものである。Bloomfield は、the seven cardinal virtues は the four cardinal virtues と the three Christian virtues の 2 種類から構成され、Temperance と Prudence は共に the four cardinal virtues に含まれると述べている（66)。また、Bloomfield は、キケロが the four cardinal virtues を、プラトン（Plato, c. 427-c. 347）が the three Christian virtues を唱えたとし、そして、これらの徳と七大罪源のそれぞれの起源は独立しており、中世期の作家は徳と七大罪源を対立させて描くことに苦心したと記している。中世期の作家は悪徳を人間の敵として、あるいは敵であるだろうとして作品を書かなければならなかったが、このことを自らの課題であるとし、楽しんでいた。Bloomfield はここにスペンサーの名を挙げている（67)。Pallen は「4 つの基本徳目（the cardinal virtues）の 1 つであるとする」(938)。Schmidt: " 'The Spirit of Temperance': more than mere moderation, this is restraint and self-control, much valued by the ancient Stoics but also seen as the basis of Christian asceticism and as a remedy for anger, greed and pride" (709) .

（3） *FQ* 714.

（4） 他の研究者による "Prudence" の定義を下に挙げておく。「行うべきことについての正確な知識。あるいは、いっそう広い意味で、行わなければならないこと、および避けなければならないことについての知識。知的徳であって、この徳によって手近にあることがらについて善と悪とを見分ける。この意味において、賢明は倫理徳であって、この徳によって人は目的に到達するため、あるいは悪を避けるために適した手段を考え、選び、準備することが出来る」(ハードン 218)。Attwater: "The right reason of doing or of behavior; whereas art（q.v.）is the right reason of making or of production. In its essence it is an intellectual virtue, residing in the understanding, but as a cardinal moral virtue its office is to point out the golden mean between excess and defect in the matter of the other cardinal virtues（q.v.）. It is the first of the cardinal virtues, enabling the intellect to see what is virtuous and what is not, how to do the one and avoid the other, and prompting the will to act accordingly.（434）. Schmidt: 'The Spirit of Prudence': the virtue of planning and foresight. Though called *spiritus intellectus*, it signifies not 'speculative understanding' but sagacity or 'practical moral insight', with which it was often linked. Personified as 'Dame Prudence' in Chaucer's Melibee, it is never a purely 'secular' virtue, and is commended in Christ's exhortation to measure the 'cost' of discipleship"（709）.

（5） Cooney はスペンサーが『マタイによる福音書』の「山上の説教」を題材としたとされる Mammon と、「山上の説教」からの影響は明確ではないが、聖書から影響を受けているとする Phaedria の場面を中心に論を展開している。その中で、the Palmer に見られる分別の徳、理性を扱っている。

（6） Brooks-Davies, Douglas. 118. また、同書にて、Tuve が *Allegorical Imagery: Some Mediaeval Books and Their Posterity* の中で、基本徳目について述べていることに触れている（119)。

（7） Evans は導かれる者と導く者の例として、*Aeneid* における Aeneas と Venus の関係を挙げている(121)。同様に、*Divina Commedia* におけるダンテ・アリギエーリ（Dante Alighieri, 1265-1321）と Virgil の関係が挙げられる。特に Mammon の洞窟は冥界と解釈されることがあり、冥界を案内する点においては、*Aeneid* における Aeneas と Cumae の巫女、*Divina Commedia* における Dante と Virgil の関係が相当する。また異なる点は、Guyon と the Palmer においては共に旅を続けることが暗示されているが、Aeneas と Cumae の巫女、Dante と Virgil は離れてしまう。

（8） 西風はアングロサクソン、つまりキリスト教の文化ではなく、ギリシア・ローマ由来の文化である。すなわち、この場面では、異教の風に向かおうとする Guyon を Palmer は叱ったのである。ルネッサ

ンス期の文化潮流に乗ったスペンサーの、一見するとカトリック的な取捨選択の表れと言えるのではないだろうか。パーシー・ビッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）は西風を春の訪れを告げる風と呼び、チョーサーは『カンタベリー物語』の冒頭で西風をよい意味で使用している。

（9） Miller, Robert P. は、武具を身につけることが可能な人物は、ほんの少数であったと述べている。そうした人物は、最も高貴で、最も忠誠心があり、最もよく教育を受けていなければならず、このように選ばれる人間はごく少数であるため、“election”、すなわち特定の使命を神から与えられた者という考え方が広く知られていた。また、Miller は、騎士の乗る動物が馬であるのも、馬が最も高貴な動物であると考えられていたからと示している（180-183）。

（10） 河合隼雄『昔話の深層　ユング心理学とグリム童話』（講談社、2011）に収録されている「影の自覚」において、ユングが中世の哲学者の考えを使用して人間の最初の数は、「一」ではなく、「二」ではないかと述べていることに言及している。「一」が「一」である限り「数」を意識することがなく、「二」があるからこそ「一」の概念が生じるというものだ。すなわち、対立や並置の意識が生じてこその「一」の概念ということである。Evans は、Guyon には節制と不節制の両方の性質が見受けられると述べている（112）。

引用・参考文献

Anderson, Judith H. “Prudence and her Silence: Spenser’s use of Chaucer’s Melibee.” *ELH* 62（1995）: 29-46. Print.

Attwater, Donald, ed. *The Catholic Encyclopædic Dictionary.* London: Casell, 1931. Print.

Auerbach, Erich. *Dante: Poet of the Secular World*. Trans. Ralph Manheim. New York: New York Review Books, 2006. Print.

Benson, Larry D, ed. *The Riverside Chaucer.* Oxford: Oxford UP, 2008. Print.

Berger, Henry Jr. “The Allegorical Temper: Vision and Reality in Book II of Spenser’s *Faerie Queene*.” *Yale studies in English* 137（1957）Print.

Bloomfield, Morton W. *The Seven Deadly Sins: An Introduction to the History of a Religious Concept, with Special Reference to Medieval English Literature.* Michigan: Michigan State College P, 1952. Print.

Brooks-Davies, Douglas. *Spenser’s Faerie Queene: A Critical Commentary on Books I and II.* Manchester: Manchester UP, 1977. Print.

Black, Lynette. “Prudence in Book II of *The Faerie Queene*.” *SSt* 13（1999）: 65-88. Print.

Cooney, Helen. “Guyon and his Palmer: Spenser’s Emblem of Temperance.” *RES* 51（2000）: 169-92. Print.

Evans, Maurice. *Spenser’s Anatomy of Heroism: A Commentary on ‘The Faerie Queene’.* Oxford: Cambridge UP, 1970. Print.

Freeman, Rosemary. *The Faerie Queen: A Companion for Readers.* London: Chatto&Windus, 1970. Print.

Heale, Elizabeth. *The Faerie Queene: A Reader’s Guide*. Cambridge: Cambridge UP, 1987. Print.

Langland, William. *Piers Plowman A Parallel-Text Edition of the A, B, C and Z Versions Volume II: Introduction, Textual Notes, Commentary, Bibliography and Indexical Glossary.* Ed. A.V.C. Schmidt. Kalamazoo: Medieval Institute Publications, n.d. Print.

Miller, Lewis H. Jr. “A Secular Reading of *The Faerie Queene*, Book II” *ELH* 33.2 June 1966: 154-69. Print.

Miller, Robert P. *Chaucer: Sources and Backgrounds.* New York: Oxford UP, 1977. Print.

Mills, Jerry Leath. “Prudence, History, and the Prince in *The Faerie Queene*, Book II” *HLQ* 41（1978）: 83-101. Print.

Morgan, Gerald. *The Shaping of English Poetry: Essays on Sir Gawain and the Green Knight*, *Langland*, *Chaucer and Spenser*. Germany: Peter Lang, 2010. Print.

Pallen, Conde B. *The Catholic Dictionary*. New York: The Universal Knowledge Foundation, 1929. Print.

Schaff, Philip, ed. *Nicene and Post-Nicene Fathers and Christian Church*. Michigan: WM. B. Eerdmans, 1973. Print.

Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Ed. A. C. Hamilton. London: Longman, 2006. Print.

Silberman, Lauren. "*The Faerie Queene*, Book II and the Limitations of Temperance." *MLS* 25（1988a）: 9-22. Print.

Stambler, Peter D. "The Development of Guyon's Christian Temperance." *ELR* 7（1977）: 51-89. Print.

Tuve, Rosemond. *Allegorical Imagery: Some Mediaeval Books and Their Posterity*. Princeton: Princeton UP, 1966. Print.

河合隼雄『昔話の深層』講談社 2011

ジョン・A・ハードン編著『現代カトリック事典』エンデルレ書店 1982